

審判規定改正の目的

過去4年間で柔道が、とても前向きな進化を遂げたのは明らかである。リオオリンピックにおける成功は、これを具体的に証明している。ここ数年で選手の技術的な能力は大きく向上した。例えば、大会におけるテクニカルスコアの数は急激に増えた。2015年8月にカザフスタンで開催されたアスタナ世界選手権においては、いくつかの階級において80%以上に上った。

今回の分析は、IJF理事、増員された柔道に関する専門家や柔道ムーブメントに関わるメディア代表者の監督下で行われた。今回の分析を受けて公表された、いくつかの変更や改正された規定が、今後、柔道に、より明快さとダイナミックな動きをもたらすことになると考えている。新しい規定は、各国連盟や20名から構成されるIJFコーディネーション委員会ディレクターからの提案を基に精査され、その後IJF専門家ならびにテクニカル部門のIJF理事により分析された。

広く(情報を)共有し、民主的な同意を経て、今回これらの案が採用された。これらは、柔道の根本的な価値、道徳を踏まえて作成されており、我々の柔道が生きたスポーツとして現代の流れに適合し、より多くの観衆を魅了するであろうことを保証するものである。

採用される審判規定については、1月にアゼルバイジャンのバクーで開催された審判・コーチングセミナーで発表された。柔道家、コーチ、ファン、メディアは、IJFユーチューブチャンネル(www.youtube.com/judo)において、1月6日、7日よりバクーのセミナーを見ることができる。まず、審判員、コーチ、各連盟ならびに大陸の代表者に対し、新しい規定の各ポイントについて講義と実技講習を用いて詳細に説明される。それから試験期間が開始される。試験期間中、新しい規定は必要があれば改正される。この過程により、我々柔道コミュニティは、次のオリンピック出場資格獲得サイクルを、より最適な審判規定をもって開始することが出来る。ブダペスト世界選手権の終了後に、次回オリンピック出場資格獲得期間に適用される審判規定を決定する会議が開催される。

以下が新しく見直された規定の要点である。

試合時間

- 男女共に試合時間を4分とする。これは、IOCが男女の公平性を求めていること、ならびにオリンピックにおける男女混成団体戦で試合時間を統一するためである。

スコア

スコアは、「一本」と「技あり」のみとする。

「技あり」には、今までの「有効」も含まれる。

「技あり」2つでも、「一本」と同等とはしない（“合わせ技一本”の廃止）。

抑え込み時間

10秒で「技あり」、20秒で「一本」とする。

試合の決着

規定試合時間(4分)において、試合は「技あり」、もしくは「一本」のテクニカルスコアでのみ決着がつくこととする。

(直接もしくは累計による)「反則負け」を除き、「指導」(1回目、2回目)の違いだけでは勝者を決定しない。

「指導」は、相手のスコアとはならない。

ゴールデンスコア

規定の試合時間が終了した時点で、試合両者にスコアがない場合、もしくはスコアが同等である場合、「指導」の有無にかかわらず、その試合はゴールデンスコアに突入する。

ゴールデンスコア入前の規定試合時間内に与えられたスコア、ならびに罰則は引き続きスコアボードに反映される。

スコアが与えられた時点で、ゴールデンスコアは直ちに終了する。

ゴールデンスコア中に「指導」が与えられた場合、与えられた選手が相手よりも多くの「指導」を受けたことになる場合、その試合は終了する。

(別紙資料 ゴールデンスコア参照)

罰則

指導4ではなく、指導3で「反則負け」となる。

3回目の「指導」が与えられた時点で「反則負け」となる。

審判の作法や審判への理解を明確にするため、過去に柔道衣の握り方で罰則が与えられていたピストルグリップ、ポケットグリップなどの組み手について、今後は罰則を与えない。

組み方

標準的でない組み方の場合、直ちに攻撃しなければ「指導」が当てられる。

ベアハグ(投げるために相手に抱きつく行為)を行う場合は、攻撃する選手が少なくとも片方の組み手を持っていないといけない。組手のない状態において両手で相手に抱きつく行為には「指導」が与えられる。柔道衣に触れただけでは組んでいるとはみなさない。しっかり柔道衣を握っていること。相手の袖の中に指を入れる行為は、今まで通り罰則を与える。

攻撃をしようとしなない、防御姿勢など柔道精神に反する消極的な行為に対しては厳しく「指導」が与えられる。

投技を準備するのに時間がかかることもあるため、組んでから攻撃を掛けるまでの時間を45秒に延長し、それまでに技がない場合は「指導」を与える。

脚を掴む行為や下穿きを握る行為については、1回目は「指導」が与えられ、2回目は「反則負け」が与えられる。



安全性

IJFでは、可能な限り柔道による外傷事例を抑えるため、安全性に関する規定を精査してきた。受けが背中から着地するのを避けるために行う試みについて、頭や首、脊椎を危険にさらす行為があれば、「反則負け」が与えられる。

選手が「一本」を避けるために故意にブリッジの体勢になった場合、主審は今までのように「一本」を宣告するのではなく、ブリッジの体勢で着地した選手に対して「反則負け」を与える。



ただし、これにより敗退した選手は、その後に試合（敗者復活戦や3位決定戦）があれば出場することができる。

柔道精神に反するような行為は直ちに罰せられる。

若い柔道家に悪い例を見せないように、両肘が着地した場合には技の効力を認め「技あり」を与えることができる。片肘で着地した場合には、技の効力を認めず、スコアとしての評価をおこなわない。



投技と返し技

取の攻撃に対して受が返し技を施した場合、自身の体が先に着地した選手が投げられたこととする。

スコアを与えるに値する場合、適切なスコアが与えられる。

両選手が同時に着地した場合は、双方にスコアを与えない。

着地した後に選手が施した技(返し技)については、スコアの対象とはしない。

着地後のいかなる行為も寝技とみなす。





柔道衣

より効率的に、より良い組み手で組むことができるように柔道衣の上衣はきつく縛った状態の帯の中に収まっていなければならない。さらに、選手は、主審が「待て」を宣告してから「はじめ」を宣言するまでの間に、上衣と帯を素早く直すこと。

仮に選手が時間を稼ぐ目的で柔道衣もしくは帯を乱した場合、「指導」を与える。

別紙資料 ゴールデンスコア



IJF Referee & Coach Seminar



(試合終了)ゴールデンスコア突入 -> 勝者 白

4分終了時に白、青の両選手にスコアがない、ならびに指導がない(もしくは指導数が同じ)場合

→ ゴールデンスコアにおいて最初にスコアを獲得した選手の勝ちとなる



IJF Referee & Coach Seminar



(試合終了)ゴールデンスコア突入 -> 勝者 白

4分終了時に白、青の両選手にスコアがない、ならびに指導がない(もしくは指導数が同じ)場合

→ ゴールデンスコアにおいて、最初にペナルティを受けた選手の負けとなる



IJJF Referee & Coach Seminar



(試合終了)ゴールデンスコア突入 ->

試合継続

->

白の勝ち

4分終了時に白、青の両選手が同スコア、白に指導1が与えられている場合

→ゴールデンスコアで最初に青が指導を受けた場合、両選手が指導1で並ぶので試合は継続される

ゴールデンスコアで最初に白が指導を受けた場合、白の負けとなる

ゴールデンスコアで両者に同時に指導が与えられた場合も、白の負けとなる

→両選手が指導1で並んだ後、次にペナルティが与えられた場合、与えられた選手の負けとなる



(試合終了) -> ゴールデンスコア突入
試合継続 -> 試合継続 -> 青の勝ち

4分終了時に白、青の両選手が同スコア、青に指導2が与えられている場合

→ゴールデンスコアで最初に白が指導を受けた場合、白が指導1・青が指導2となり試合は継続される
(ゴールデンスコアで最初に青が指導を受けた場合、青の敗退となる)

→次の指導を白が受けた場合、両選手が指導2で並ぶので試合は継続される

→両選手が指導2で並んだ後、次にペナルティが与えられた場合、与えられた選手の負けとなる